特集１：学問の不可視の前提を外して研究しよう

樫田　美雄
神戸市看護大学
kashida.yoshio@nifty.ne.jp

Special Issue 1:

Let's study without the invisible premise

KASHIDA Yoshio
Kobe City College of Nursing

1. 本特集の趣旨と概要

本特集は 2019 年 6 月 16 日午前に『福祉社会学会第 17 回明治学院大学大会』において行われた，研究委員会主催テーマセッション「学問の不可視の前提を外して研究しよう」を基盤に編集されたものである．ご協力頂いた各方面に感謝を申しあげたい．

この元となった福祉社会学会研究委員会主催テーマセッションは，単に研究委員会が主催したというだけの企画ではない．それは，福祉社会学会と日本保健医療社会学会との学会間交流に関する理事会間合意を受けて，両学会の交流企画の一部として開催されたものである．したがって，そのテーマ設定と報告者設定の両方において，２学会の交流企画にふさわしい企画となっている．

まず，テーマ設定については，樫田が両方の学会に所属していたこともあり，樫田の方から「学問の不可視の前提を外して研究しよう」というテーマ案を研究委員会に提案して承認を受け，これが今回のセッションのテーマとなった．趣旨は，次節掲載のとおりである．ついで，セッションの構成については，このテーマに沿った報告となるよう 4 者が，両学会の所属に関するバランスを考慮しながら選ばれた．具体的には登壇者のうち 2 名（樫田美雄と高森明）は，両学会の会員であり，残り 2 名は，それぞれ片方の学会の会員であった（時岡新が，日本福祉社会学会の会員であり，上野彩が日本保健医療社会学会の会員である）．なお，司会は，樫田が担当した．

当日の会場には，副田義也福祉社会学会初代会長・現顧問，藤村正之福祉社会学会現会長，上野加代子福祉社会学会研究委員会現委員長等関係者が多数来場し，質疑応答も活発に行われた．

諸事情から，4 報告のうち，2 報告が原稿化されてこの特集に掲載されることとなった．以下，まず，福祉社会学会ニュースレターに掲載された「企画趣旨文」を再掲したうえで，解説する．ついで，4 報告の順番とタイトルを列記したうえで，当日の議論を簡単に紹介することで，本特集の「前書き」とすることにしよう．

2. 特集のもととなったテーマセッションの企画趣旨文と若干の解説

以下の引用部分が，本特集のもととなったテーマセッションの企画趣旨文である．

＊＊＊テーマセッション「学問の不可視の前提を外して研究しよう」企画趣旨文＊＊＊

福祉も保健医療も社会制度的な枠組みが強く効いている領域である．そこに更に学問そのものの制度化の進展という趨勢も加味されて，制度的な枠に依拠した，枠の外側からの言及を想定していない研究が，次第に増えてきているように思われる．しかし，そのような研究では，領域的有効性に強く志向してしまう分，ぎゃくに大きなブレークスルーに結びつきにくくもなってしまうのではないだろうか．そういう「枠付けられた研究」にはどうしても「縮小再生産リスク」がともなってしまうのではないだろうか．つまり，予想された回答選択肢群の間での優劣に関する議論に，議論が収束してしまい，新しいはずの研究成果が，既視感のあるものになってしまっているのではないだろうか．

この「縮小再生産リスク」を避けようとするのならば，既存の選択肢群の外に回答を探す研究手続きが必要である．そしてこの探索は，それぞれの領域における「正しさ」を，戦略的に抑制し，宙吊りにすることで開始されることになるだろう．すなわち「領域的正しさを抑制すること」こそは，学会内での討議の「社会学性」を，戦略的に強化する方策かもしれないのである．

人々の生活世界というものの多様性と総合性をよく考えてみるならば，福祉も保健医療も，いわゆる制度的制約の外側に大量の人々の生きざまを伴っているはずだ．そして，そこには，社会学的な探究対象としての，「現代社会性」も多く存在しているはずだ．つまりは，表面的な制度の覆いをとりはらってしまえば，新しい研究テーマが大量に見いだされる領域として，「福祉」も「保健医療」もある，といえよう．方法論的な言い方をするならば，いわゆる「領域的な常識」を破棄してこそ，「制度的制約の外側の人々の生きざま」を把握できる，という言い方もできるだろう．

たとえば，生まれ育ったコミュニティから積極的に距離を置くことが，夫から距離を置くことが，コミュニティのメンバーや夫との人間関係を温存する助けになっている，というような逆説が，地域での暮らしというものにはあり得る（上野彩報告）．

社会学研究から，社会がある，という前提を取り去ることは可能だろうか．それは，かなり困難な取り組みだが，そこを乗り越えるのなら，次には，人間世界が（少なくとも潜在的には理解しあうことが可能な）人間から成り立っているという前提をも乗り越え可能になるのではないだろうか．人間世界内で達成される有意味さは，誰にでも，貴重なものだ，という暗黙の理解を前提に，従来の社会学は，コミュニケーションの必要性や重要性を，証明不要のものとして考えてきた．しかし，発達障害者が，その旧来的前提を疑うところからスタートして，新しい社会像/社会関係像を呈示してくれるのならば，社会的な繋がりを，「仲間に対してすら」拒絶する発達障害者的リアリティこそが，新しい文化を産み出すんだ，というストーリーも成り立ちうるのではないだろうか．（高森明報告）．

吃音者が流暢に話をしているときにこそ，吃音者は自らが吃音者であることを深く自覚する，という当事者の語りを，矛盾として聞くのではなく，さもありなんと，素直に真剣に聞き入れるのならば，そこから「医学的障害研究」でも「障害学的障害研究」でもない「障害の社会学」の可能性が見えてくるだろう（樫田美雄報告）．

＊＊

上記趣旨文の要旨を繰り返すなら，以下のようになるだろう．両学会には「縮小再生産リスク」がある（第１段落）．したがって「既存の選択肢群の外に回答を探す研究手続きが必要」である（第２段落）．そのためには「方法論」として「『領域的な常識』を破棄」することが有効である（第３段落）．そうすれば，「『制度的制約の外側の人々の生きざま』を把握できる」ことになるだろう．

当日は，樫田が，自らの報告のほかに，４報告がどのように「不可視の前提」から離脱しているのか，の模式図を配布し，議論のたたき台を提供した．

3. テーマセッションにおける４報告の順番とタイトルの一覧および当日の議論

４報告の順番とタイトルの一覧は以下の通りである．

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　タイトル一覧　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1. 「住まないこと」によってもたらされる地域の役割
——未確定希少難病患者との共同生活を通じて　上野彩（大阪大学大学院）
2. 宣言者が語るアブノーマライゼーション宣言——反集団同一性を中心として
高森 明
3. どもってはいるけれども，吃音者ではない，を可能にするメカニズムの探究こそ社会学　樫田美雄（神戸市看護大学）
4. アクティヴ・インタビューと語りの生成 ——調査者の関与について，問いと応えの明示について　時岡 新（金城学院大学）

＊＊

この４報告について 30 分以上の討論が行われたが，そこで取り交わされた議論のうち，上野報告と時岡報告にのみ，ここでは言及しておこう．

まず，上野報告については，ありとあらゆる「前提」から自由になることができるわけではないことが浮き彫りになったように思われる．家族社会学的前提（夫婦の共同生活が夫婦の生活を支える基盤である）や地域社会学的前提（転居してしまえば，前居住地からの影響は逓減していく）に反する事実の呈示には成功したものの，医療的前提からは逃れることが困難であることが判明した．ついで，時岡報告については，社会調査法的に当たりまえの主張が，インタビュー論の現在の常識のなかでは通用しにくくなっ

ていること．そのような逆転/背理に気づきにくくなるいろいろな要素が現在の社会学の調査環境の中にはあるようにおもわれること．それらのことが気づかれた．

ということで，関係者の多大なご支援により，多様な気づきに満ちあふれた豊かな時間を得ることができたことを，喜びを持って報告して結語としたい．

＊＊

【編集後記】　『現象と秩序』第 11 号をお届けします．今号より編集長が交代しました．とはいえ，編集作業については右も左もわからない状況であるため，編集作業自体は前編集長の主導下でおこないました．前編集長および編集委員，編集幹事，編集・印刷協力をいただきました皆様の多大なるお力添えに，ここに感謝の意を表したいと思います．

さて，今回は，2 つの特集（各 2 本）と 2 本，合わせて 6 本の論考が収録されています．

第 1 特集「学問の不可視の前提を外して研究しよう」では，第 17 回福祉社会学会における同テーマの報告を，論考の形にしていただきました．「普段気づかれないこと」，とりわけ「業界の常識」といった「不可視の前提」に縛られていて気づかれないこと，あるいは気づかないようにしていたことを明るみにしていくことは，生活者のリアリティに沿った学問の確立にとって重要な作業だと思われます．

第 2 特集「音楽療法のエスノメソドロジー」では，両論考とも音楽療法場面を撮影したビデオデータを扱っています．拙稿の話で恐縮ですが，データを見ているうちに次々と新たな気づきが生まれ，当初書こうと思っていた内容とは全く異なるものになってしまいました．しかし，これこそが，データから理論をつくり上げる過程なのだろうと感じています．

昨今，量的データには表れえない，質的データへの関心が高まりつつあります．第 2 特集の前書きにも記しました私生活データへの関心は，「気づかれていないこと」あるいは「気づかなくてもいいと思われていたこと」への関心です．こうした生活環境データは，身体化されているがゆえに，当事者にとって言語化しづらいデータでもあります．それを記述していくスキルは，社会調査教育において今後より重視されるべきではないでしょうか．

ご意見やご要望，また，今後の特集に関するご提案等ございましたら，下記の編集室までお知らせくださいますと幸いです．今後とも『現象と秩序』をよろしくお願いいたします．

(Y.H.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2019 年度）
編集委員会委員長：堀田裕子(愛知学泉大学)
編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)，　中塚朋子(就実大学)
編集幹事：尾﨑友祐(神戸市外国語大学)
編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第 11 号　　2019 年　10 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4
神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室
電話・FAX）078-794-8074（樫田研），e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp
PRINT ISSN　：2188-9848
ONLINE ISSN　：2188-9856
http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html